

【暗証聖句】

「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。」申命記 28 章1, 2 節

【日・救済の計画】

イエス様はすべての人を救うために十字架にかかって死んでくださいました。すべての人に永遠の命への道が開かれたのであります。しかし、誰でも自動的に救われるわけではありません。イエス様を救い主として信じる信仰が求められます。ヨハネの手紙一 5 章 13 節に、「神の子の名を信じているあなたがたに、これらのことを書き送るのは、永遠の命を得ていることを悟らせたいからです」とあります。ここに神の子の名、すなわちイエス・キリストの名を信じるものは、永遠の命を得ることができると、はっきり書かれてあるわけですが、逆に言えば、イエス様を信じない者は永遠の命を失う可能性を示唆してもいます。また、マタイ 10 章 22 節に、「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人に憎まれる。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われる」と、イエス様を信じ永遠の命に至るには、イエス様の名のゆえに、イエス様を信じない人々から憎まれるのを覚悟し、それに最後まで耐え忍ばなければならないことが告げられています。救いに至る道には困難が伴うということです。さらに、ペトロの手紙二 1 章 10、11 節では、「だから兄弟たち、召されていること、選ばれていることを確かなものとするように、いっそう努めなさい。これらのことを実践すれば、決して罪に陥りません。こうして、わたしたちの主、救い主イエス・キリストの永遠の御国に確かに入ることができるようになります」と、永遠の御国に確かに入ることができるように、あることを実践して、罪に陥らないようにしなさいと教えられています。あることとは、ペトロの手紙二 1 章5～7にあるように、「あなたがたは、力を尽くして信仰には徳を、徳には知識を、知識には自制を、自制には忍耐を、忍耐には信心を、信心には兄弟愛を、兄弟愛には愛を加え」ということです。ただ信じれば良いわけではないことがわかります。それは常に罪との闘いがあるからです。力を尽くして、信仰をより一層深めていく。信仰に徳を、知識を、自制を、忍耐を、そして愛を加えていくように、深めていくことです。ある意味、信仰は戦いです。パウロは、「わたしは立派に戦いぬき、決められた道を走りとおし、信仰を守り抜きました」(第二テモテ4:7)と言っているように、それは信仰を守り抜くための戦いなのです。悪魔がイエス様から私たちを引きずり落そうといつも狙っているからです。

【月・よく聞き従う】

モーセ五書の最後の書である申命記は、死を前にしたモーセがモアブの荒れ野で民に対して語られたものと言われています。日本語の申命記と言う言葉は、昔の中国の漢語訳聖書からきており、「繰り返して命じる」という意味があります。原語のヘブライ語では、冒頭の言葉から、「デヴァリーム・言葉」と呼ばれており、ギリシャ語の70人訳聖書では、「第二の律法」と呼ばれています。その中身は、モーセがこれまでの40年での荒野の放浪の歩みを回想しながら、イスラエルの第二世代たちに対して大切なメッセージ、特に、神様の戒めを守ることの重要性が語られていきます。申命記 28 章から見てみましょう。

申命記 28 章 1 節「もし、あなたがあなたの神、主の御声によく聞き従い、今日わたしが命じる戒めをことごとく忠実に守るならば、あなたの神、主は、あなたを地上のあらゆる国民にはるかにまさったものとしてくださる。」

申命記 28 章 2 節「あなたがあなたの神、主の御声に聞き従うならば、これらの祝福はすべてあなたに臨み、実現するであろう。」

申命記 28 章 9 節「もし、あなたがあなたの神、主の戒めを守り、その道に従って歩むならば、主はお誓いになったとおり、あなたを聖なる民とされる。」

このように申命記 28 章では、神様の御声に聞き従うならば、あらゆる国民に勝ったものとされ、祝福が臨み、聖なる民とされると、つまり神様の教えを忠実に守ることによって素晴らしい祝福に満ちた人生となることが約束されています。逆に、「もし主の御声に聞き従わないならば、呪いが臨む」(申命記 28 章 15 節)とも書かれてあります。神様の御声に聞き従うことは難しいことでしょうか。申命記 30 章を見ると、それは決して難しいものではないと教えられています。

申命記 30 章 11、12 節「わたしが今日あなたに命じるこの戒めは難しすぎるものでもなく、遠く及ばぬものでもない。それは天にあるものではないから、「だれかが天に昇り、わたしたちのためにそれを取って来て聞かせてくれれば、それをを行うことができるのだが」と言うには及ばない。」

神様が私たちに命じておられるものは、とても身近な、日々の生活の中でのことであります。天の原則が反映されていますが、しかしあくまでもそれはこの地上において、私たちが行うことができる範囲でのことであります。天にまで上り、そこから何か秘伝を持ち帰らなければ守れないというものではないのです。それと共に、次のようにも約束されています。

申命記 30 章 6 節「あなたの神、主はあなたとあなたの子孫の心に割礼を施し、心を尽くし、魂を尽くして、あなたの神、主を愛して命を得ることができるようにしてください。」

心の割礼とは、心を覆っていた皮を除去すること、かたくなな心が柔らかになることを意味しています。それを主がしてください、それによって「心から主を愛して、命を得ることができるようにしてください」と約束されています。そこには努力を超えた神様の不思議な力が働くということです。それゆえ、私たちは自分の心、思い、考えを、主に委ねていくことが大切です。

【火・主に栄光を帰す】

箴言 3 章 5、6 節「心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず、常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば主はあなたの道筋をまっすぐにしてください。」

天国に続く人生の道をまっすぐに進んでいく秘訣は、自分の分別に頼らないで、常に主を覚え、心を尽くして主に信頼し、主が備えてくださった道の上を、主と共に歩いて行くことです。常に主を覚える。常に主を第一とする。その秘訣の一つとして、次のように書かれています。

箴言 3 章 9、10 節「それぞれの収穫物の初物をささげ、豊かに持っている中からささげて主を敬え。そうすれば、主はあなたの倉に穀物を満たし、搾り場に新しい酒を溢れさせてください。」

収穫物の初物を、豊かに持っているときにささげることにより、主を敬うことが教えられています。これを現代の什一や献金におきかえると、それらを後回しにするのではなく、最初に捧げる、あるいはより分けておくことにより、神様を第一とするということです。あと回しにすると、金欠になってささげることが出来なくなってしまうということもあるものです。だから最初に用意しておくわけです。そのように神様を第一としてささげものをするとき、神様は経済的に豊かに祝福し、食べる物が無くて困るということもないと約束されています。

昔のことですが、教会に一人の盲人の女性がいました。ある年の瀬のこと、あん摩の仕事がなぜか減ってしまい困っていました。普段なら年末ともなると、仕事が増えるものなのですが、その年はなぜか仕事がなく、このままではお正月のお餅も買うことができません。彼女は神様に、「主よ、どうして今年は仕事がないのでしょうか。これではお餅を買うお金もありません」と祈ると、心の中ではっと思い出されることがあったのです。それは数か月前のこと、やはりお金が無くて、その月の什一を先延ばしにしたことがあったのです。そのことを急に思い出したのです。彼女はそのことを心から悔い改め、次に仕事が入ったら、まず最初に主にお返ししますと約束しました。すると、しばらくしていくつかの仕事が入ってきました。彼女は約束通り、それをそのままささげたのです。お餅を買うお金もないほどだったのですが、生活費にはまわさず、先延ばしにしていた分も含めて、まず最初にささげたのです。するとどうでしょう。その後、仕事が突如増えだし、普段の月の 2 倍の仕事が与えられたのでした。

【水・什一の契約】

マラキ書 3 章 7 節「あなたたちは先祖の時代からわたしの掟を離れ、それを守らなかった。立ち帰れ、わたしに。そうすれば、わたしもあなたたちに立ち帰ると、万軍の主は言われる。しかし、あなたたちは言う。どのように立ち帰ればよいのかと」

イスラエルは約束通り、主に従い、忠実であったとき繁栄しましたが、対照的にそうでないときには困窮に陥りました。それは民の心が主から離れてしまったために、主も彼らから離れてしまったからです。だから主は、繰り返し、「私に立ち帰れ」と言われました。では、どのように立ち帰れば良いのでしょうか。そのことに関して、主は旧約最後の預言者と言われるマラキを通し、驚くべきことを語られたのであります。

マラキ書 3 章 8～10 節「人は神を偽りうるか。あなたたちはわたしを偽っているがどのようにあなたを偽っていますか、と言う。それは、十分の一の献げ物と献納物においてである。あなたたちは、甚だしく呪われる。あなたたちは民全体で、わたしを偽っている。十分の一の献げ物をすべて倉に運び、わたしの家に食物があるようにせよ。これによって、わたしを試してみよと万軍の主は言われる。必ず、わたしはあなたたちのために天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであろう。」

什一が主に立ち帰る鍵となると、主は言われたのです。什一に忠実ではないとき、主に対して単に不忠実であるばかりでなく、主を偽っていることになると言われました。主は「これによって、わたしを試してみよ」と言われました。基本的に聖書では、主を試してはならないと教えられているのですが、この什一だけは主を試してみよと言われていました。収入の十分の一もささげてしまうと、生活できなくなってしまうのではないかと不安になるかもしれません。しかし、そのとき主は、「必ず、わたしはあなたたちのために天の窓を開き、祝福を限りなく注ぐであろう」と約束してくださっているのです。これを試して見よと言われたのです。神様は私たちとの信頼関係を築き上げていくために、この什一の制度を定めておられるのです。

【木・何よりもまず】

イエス様は、山上の説教の中で、「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。それはみな、異邦人が切に求めているものだ。あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」(マタイ 6:31～33)と教えられました。主は私たちが生きていくために必要なものをすべてご存じであり、必要に応じて与えてくださいます。もし、私たちが、何を食べようかと思悩むことがあるなら、それは心の平和を失っている証拠です。主は「平和を実現する人々は、幸いである」(マタイ 5:9)と言われました。本当にその通りです。だから、「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい」と言われたのです。そこには平和があるからです。そして、イザヤ 26:3 で、「堅固な思いを、あなたは平和に守られる。あなたに信頼するゆえに、平和に。」と書かれてあるように、主にどこまでも委ね、信頼していくことです。そうすれば必ずと平和がおとずれるのです。

ところで、私たちは罪を抱えていると、神様との間における平和が失われてしまうものです。ヨハネの手紙一 1 章 9 節に、「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」と書かれてあります。罪を言い表すとは、自分の犯した罪を認めるという事です。人まえであったとしても、自分を繕うのではなく、ありのままの弱さを認めることです。そうするなら、主は罪を赦し、清めてくださり、主との平和を取り戻すことができます。